

戦前の日本女子大学における実践的な住居学教育

—— 1931 年から 1933 年に建設された夏季寮の建設過程に着目して ——

Housing Education at Pre-WWII Japan Women's University:
Kaiganryo Dormitory and Sansenryo Dormitory (Constructed from 1931 to 1933)

住居学科 渡辺 弥子 葉袋 奈美子
Dept. of Housing and Architecture Yako Watanabe Namiko Minai

抄 録 「海岸寮」, 「三泉寮カテージ 1 号館・2 号館・3 号館・4 号館」は, 1931 年から 1933 年に建設された日本女子大学の夏季寮である。これらは当時住居学教育を受けた学生が設計し, 実際に建設された。このような教育は建築学的要素を含み, 現在の住居学教育よりも実践的である。また, 本学の教育方針「自学自動」に基づく実践型の学習でもある。本研究では, この様な教育方法の内容や背景を調査し, 夏季寮における実践的な住居学教育の内容と背景を明らかにした。建築家・佐藤功一が講じた住宅設計に関する講義で学んだ知識を設計に生かしていたことが明らかになった。佐藤は, 女性建築家を育てることを意図してはいなかったが, 助手柴谷邦と学生の意欲が, 寮の建築を実現させた。

キーワード: 住居学教育, 日本女子大学夏季寮, 佐藤功一, アクティブ・ラーニング

Abstract Kaiganryo Dormitories in the Boso Peninsula and Sansenryo Cottage Dormitories in Karuizawa were built from 1931 to 1933 as summer houses of Japan Women's University (JWU). Five dormitories were designed by students studying housing education at JWU. This practical education includes architecture and is grounded in the educational policy of JWU set forth by Jinzo Naruse. These students attended the lectures of Koichi Sato, a notable architect. What Sato taught was well reflected in the plans of the dormitories. Sato did not aim to educate female architects, but the enthusiasm of the students, as well as of Assistant Professor Kuni Shibaya, actually succeeded in actualizing the constructions of the dormitories.

Keywords: housing education, Japan Women's University, summer house, Koichi Sato, active learning

1. はじめに

1-1. 研究の背景と目的

ものづくりに関わる大学教育の中でも, 建築・住居の分野は, コストや安全面から容易なことではない。しかし柔軟な発想で意欲的に学ぶ場を持つ学生の育成のためにも, 大事な機会である。ことに近年, 地域の活性化等に大学が関わるのが求められている中で, 数多くの学生が関わる実践的な建物設計例・リノベーション例が見られる。このような取り組みは戦前の日本女子大学でも行われた。学生の設計案を夏季寮として実際に建設されることがあった。

本研究では, その一例である日本女子大学の夏季寮「海岸寮」, 「三泉寮カテージ 1 号館・2 号館・3 号館・4 号館」を研究対象とする。これらは 1931 年から 1933 年に建設され, 夏季休暇に学生が使用した大学施設である。

1901 年に開校した日本女子大学は, 創立者・成瀬仁蔵により「自学自動」の教育方針がとられた。教育方法として, 学生が一方的に講義を受ける学習ではなく, 自発的に学び実践する力を身につけるための指導が行われた。この教育方法として実習型の授業が行われ, 教育方針は寮生活の運営にも採用された。寄宿舎や夏季寮はただ生活するための場所

はなく、家政学研究の対象であった。

戦前の住居学教育は、家政学の住分野として学ばれ、本学では創立時から住分野は積極的な位置付けられた。その背景には、第1回生の井上秀により導入された「住居経済」と「大正期の生活改善運動」の影響を受けていることがある。第4代校長となる井上は、アメリカ家政学を導入し本学の家政学を確立し、生活改善運動のメンバーでもあった。1917年の家政学部学科課程改訂により、住関連科目は専門性を高めた。同年には、自学自動主義に基づく科目選択制度が導入された。

また、住宅問題や生活改善を視野に入れた佐藤功一等による早稲田流の建築教育の影響を受けている。佐藤功一は1925年から1940年まで本学の兼任教授として住居研究の講義を行い、女子への住居学教育の先駆けとなる人物である。

本学の教育方針や住居学教育の背景に、海岸寮や三泉寮カテゴリーが建設されたことが考えられる。夏季寮の設計を行った学生は佐藤の講義を受けており、講義で学んだ内容を夏季寮の設計に生かしていたことが考えられる。

本研究では、海岸寮と三泉寮カテゴリーの建設過程と学生の関わり並びに、住教育の実態を明らかにする。また、当時教鞭をとった佐藤功一の住教育の内容との比較考察を行い、当時の学生が佐藤の講義で学んだ内容を夏季寮の設計に生かしていたことを明らかにすることを目的とする。

既往研究と日本女子大学図書館所蔵の桜楓会機関誌『家庭週報』や成瀬記念館所蔵の資料より、夏季寮の建設の背景、建設過程での学生の関わりや設計課題、1930年頃の佐藤功一の住教育等を調査する。

1-2. 研究方法

教育内容を確かめるために、1930年頃の佐藤功一による住宅設計の講義の資料として、1930年度の佐藤功一の講義を受けた学生の2冊のノートと、美島近一郎が著した『最近生活改善の栞』を使用する。ノートは成瀬記念館に所蔵されており、寄贈の経緯等について成瀬記念館の大門泰子氏に聞き取り調査を行った。持ち主である佐々木敬氏について、「昭和3年4月入学 昭和6年1月家事都合ノタメ退学」との記録があり、1928年4月日本女子大学校家政学部に入學し、3年生の1931年1月に結婚のため退学している。卒業していれば家政学部29回

生であり、海岸寮を設計した学生と同学年である。ノートの表紙に手書きで「佐藤教授 住居（第一編）」と書かれた140頁の資料（以下「ノート1」とする）、「住居（第二編）家三西 佐々木敬」と書かれた113頁の資料（以下「ノート2」とする）である。『最近生活改善の栞』は、1929年11月8日から17日に至る10日間にわたり、日本女子大学で開催された長崎県教育会主催の第四回女教員学術研究講習会において、本学の講師による講義の要項を筆記した書籍である。家事、裁縫、生活改善等に関する参考資料として、小学校や中等学、職業学校等の家政学を教授する教育機関の教師向けに作成された。その中で、佐藤は「住宅問題」の講座を担当した。

1-3. 既往研究

戦前の日本女子大学における住教育の歴史的研究である新居田苑子(2017)より、『家庭週報』より学生の作成した設計や模型等がまとめられ、実践的な住教育について触れているが、その詳細な内容や背景は明らかになっていない。

戦前の夏季寮に関する歴史的研究である桜楓会成瀬先生研究会(1997)や、日本女子大学の歴史的建造物の研究である鈴木賢次・小谷部育子・片山伸也・吉良芳恵・鈴木真歩・田中章・満田高久・園田潔・岸本美香子(2013)では、三泉寮カテゴリーについて触れているが、建設過程や住居学教育との関係は明らかになっていない。

石井業生(2006A)より、戦前、女性が家政学における住居学教育に力を入れた結果、日本女子大学では佐藤功一を始めとする建築家が家政学の住居学教育に積極的に取り組んだことにより、新制大学発足後に住居学という新しい学問が誕生した。この背景には、井上秀や佐藤功一が住居学教育に積極的に取り組んだことが考えられる。本研究では佐藤の住教育の内容と夏季寮の関係について記述する。

2. 1930年度の住居学教育の教育体制

1917年に改訂された家政学部学科課程では、「住居建築」「室内装飾及設備」「家具什器の取扱」「住居衛生」「住居経済」「住居の発展及比較」が置かれ、住分野の科目は専門性を高めた。ノート1には講義の目次が添付され、目次に沿って住居学教育が行われたと類推する。目次より、夏季寮の建設前の1930年度の佐藤の講義の構成が明らかになった。

目次は、「住居講義」と「研究時間」の2部で構成されている。「住居講義」には、「昭和五年度 住居講義目次（佐藤教授）一ヶ年一週二時間」と書かれ、佐藤功一が1週間に2時間の通年で行ったことが分かる（表1）。「研究時間」には、「研究時間の目次（助手）一ヶ年二学期」と書かれ、助手が2学期に、佐藤の講義とは別に設けられた学習時間を担当していたことが分かる（表2）。住居の教員である柴谷邦は「室内清掃法及家具什器手入法」という講義を担当し、その中で『家具什器の手入法（日本女子大学住居教室編）』という書籍を参考書にすることを説明した（美島近一郎（1930））。「家具什器の手入法」は研究時間に設けられた項目であり、佐藤の助手を柴谷が務めていたことが明らかになった。

2-1. 佐藤功一による講義の構成

佐藤が担当した講義の目次を表1に、助手の柴谷が担当した研究時間の目次を表2に示す。佐藤の講

義は第一編と第二編で構成された。第一編はノート1は、第二編はノート2に、それぞれ網掛けで示した目次項目を確認できた。第一編における1から11は住居史、敷地、構造等の住居計画に関する内容、12から19は採光、照明、採暖、換気等の設備に関する目次で構成される。佐藤が著した住宅の衛生的設備に関する書籍『住宅建築衛生篇（1931）』の目次は、日光、給水、給湯、排水、汚物処理、暖房、換気、照明、掃除・消毒の章で構成され、講義の目次12から19と類似し、佐藤の衛生的な住環境への関心が表れていると考察する。また、第二編における20から23より、室の方位、大きさや間取りの取り方等の住宅の平面設計に関する内容、24から55より玄関、居間、寝室等の様々な種類の部屋や空間について講じたことが読み取れる。56から66より、庭園や門、自動車庫等、住宅の屋外空間や外構の設備についても講じていたことが読み取れる。ノート2を総覧し、24から54では各室の家具や設備等に

表1：佐藤功一による講義の構成（1930年度のノート1に添付された目次より）

昭和五年度 住居講義目次（佐藤教授）、一ヶ年一週二時間					
第一編		第二編			
1	住居の意義及び職能	20	間取概要	44	書生部屋
2	敷地	21	室の方位	45	化粧室
3	構造の概要	22	室の広さ及び高さ	46	主人書斎
4	屋根	23	室の形状	47	夫人室
5	壁	24	玄関	48	児童室
6	床	25	居間	49	少年室
7	天井	26	寝室	50	青年室
8	出入口・戸及び締金物	27	台所	51	老人室
9	窓・窓障子・シャッター	28	便所	52	仏間
10	帳	29	洗面所	53	洗濯室及び乾燥室
11	家具	30	浴室	54	客用寝室
12	採光法	31	押入	55	日光室
13	照明法	32	納戸及び物置	56	壇
14	採暖法	33	廊下	57	車寄斜道
15	換気法	34	縁側	58	段
16	料理用熱	35	バルコニー	59	庭園
17	給水及び排水	36	Bay & Alcove	60	燈
18	給湯	37	階段室及び階段	61	手水鉢
19	汚物処理	38	相の間	62	臺棚
		39	食事室	63	臺櫃
		40	パントリー	64	門及び塀
		41	応接間	65	自動車庫
		42	客間	66	間貸家
		43	女中室		

ついて詳細に説明されたことが分かった。これらの住宅の設計に関する内容は、学生が課題に取り組む際に生かされたと考えられる。

佐藤は早稲田大学建築学科において、建築史から法規、構造、製図、画学、建築概論や建築計画まで、建築に関係する幅広いの講義を担当していた。1910年に早稲田大学建築学科教授となった佐藤は、1913年に「住宅建築」の授業を開設したが、これは日本で最初の住宅の設計を専門に教える科目と考えられる（米山勇（2004））。

1925年4月、日本女子大学の兼任教授に就任し、「工学博士」として「住居研究」等を講じた。佐藤は間取の問題よりも「住宅の管理、衛生、保安等」を女子教育で教授すべきと考えた（佐藤功一（1932））。表1に示される授業構成の見出しからも、設備・環境に特化した項目が、12から19までと多くを占めている。このように本学での住居学教育は、早稲田大学で行われた建築教育とは異なっていた。

表2に示すように、助手である柴谷が担当したと推測される「研究時間」の中で設計の指導が行われ、この中で夏季寮の設計の指導が行われたと考えられる。1921年に日本女子大学校師範家政学部を卒業した柴谷は1924年本学に就職し、井上秀が構築した家政学の中で「住居部門」を担当した。佐藤功一の事務所に通い製図の技術を学び、戦後の住居学科設置にも貢献した人物である。夏季寮の設計の指導のように戦前より、設計等の建築学的要素を含む専門性の高い住居学教育が行われたことが明らかになった。

表2：助手・柴谷邦による研究時間の構成（1930年度のノート1に添付された目次より）

研究時間の目次（助手）一ヶ年二学期	
1	住居史
2	設計
3	建築と経済
4	家屋保存消毒法
5	家具什器の手入法
6	室内装飾について
7	家屋の改造
8	家内清掃法
9	家具の考察
10	台所研究
11	家事教科書の研究
12	電気器具新製品の紹介及其取扱法

3. 海岸寮と三泉寮カテージの概要

日本女子大学の夏季寮では、寄宿舎と同様に家政学研究の場であると同時に精神修養を目的とした生活が送られた。1906年、学校の創設委員である三井三郎助より三井家の別荘の一角に寮舎の提供を受け、成瀬の方針により日本で最初の夏季寮として、軽井沢に三泉寮が開寮した。以後、毎年夏に3年生が、1917年以後は3、4年生が2～3週間の修養会を行った。1943年、戦争のため夏季寮は中止され、1951年に寮が再開した。1971年、軽井沢セミナーが学部1年生の必修となり、「教養特別講義」として現在も存続している。

海岸寮は1931年、千葉県富津市に建設された木造2階建ての94人収容の建坪約150坪の大規模な寮舎である。従来の夏季寮が行われた軽井沢とは異なる場所に建設された。成瀬の死後、1919年以後第2代麻生正蔵校長が指導の中心となった夏季寮では、模範的な家庭生活の実習よりも、修養的な側面が強くなっていた。1931年7月5日に開寮を迎え夏季寮としての使用が始まり、麻生が「天心寮」と命名し、直筆の肩額が飾られた。従来大学校内で開かれていた学部生1、2年生と、附属高等女学校4年生の夏季寮が開催された。1938年以降、戦争の影響から夏季寮が行われなくなった。1940年、寮の付近に飛行場が建設され環境が大きく変化し廃止された。

三泉寮カテージは、従来夏季寮が行われていた長野県の軽井沢三泉寮の敷地に建設された寮舎である。1932年に1号館と2号館が、1933年に3号館と4号館が、各棟が雑木林の中に点々と建設された。1933年以後、1カテージを1家族とした自炊生活が営まれ、井上秀指導の「家庭管理」を行う実習生活の場所として使用された。1978年から1979年、本館の増築に伴い取り壊され、4号館のみ現存する。1906年に開寮した軽井沢三泉寮は、1963年に本学が建物の寄贈を受けるまで増築等を繰り返している。学生が設計した夏季寮は、海岸寮と三泉寮カテージ4棟の5つの寮舎のみである。

4. 1931年～1933年の夏季寮建設過程

4-1. 夏季寮建設の背景と教育方針

表3に海岸寮と三泉寮カテージの建設の背景や建設過程や学生の関わりについて示す。表4にこれら

夏季寮に関する情報を学生による記述を中心に引用する。

海岸寮は、第2代麻生正蔵校長の方針により、国家社会に貢献する力を生むことを意図して建設された。麻生は海に囲まれた日本の女性が海を恐れずに親しみを持つべきであると考え、約10年前から海辺の修養寮の新設を強く願っていた。また、本学の精神教育に共感した馬場甚吾氏の厚意により、3000坪の土地の提供を受けた。馬場氏の娘は本学に2年間程在学していた学生である。教員や麻生校長がその土地に赴き、夏季寮に適した環境であったため、土地の提供を受けることが決まった。

三泉寮カテージは第4代井上秀校長の方針により、井上指導の「家庭管理」の実習の場として使用する

ことを意図して建設された（表4下線6）。建設後、成瀬の教育方針を継承した実習型の教育が行われた。初期の三泉寮提唱者の三井三郎助の子息である三井高修氏の協力があり、1932年から1933年、4棟のカテージが建設された（表4下線7）。

いずれの寮も、本学の教育方針に賛同した土地所有者の寄付や協力があり、これらの夏季寮の建設が実現したことが分かった。しかし海岸寮の建物の建設資金は、学生自らが集めた。『家庭週報』1931年3月の報告には、29回生が中心に建設費募集を行い、28回生から31回生、そして附属高等学部学生らも、音楽会の開催、寄宿舎での節約、ひな人形を売る等して建設費を捻出した記述がある。

表3：海岸寮と三泉寮カテージの建設過程での学生の関わり（『家庭週報』やその他資料より筆者作成）

寮名	年	月日	出来事
海岸寮	1919	4月7日	麻生正蔵が第2代校長に就任。
	1930	夏	本学の精神教育に賛同した馬場甚吾氏より、千葉県君津文富津町の3000坪の土地の寄付を受ける。軽井沢三泉寮（29回生の三年寮）にて海岸寮の建設が決定した。
		9月17日	29回生が中心となり、係分担して建設を計画した。28、29回生は麻生校長や教員等と、建設地を訪れ、見学と共に修養会を開催した。
		12月	10日間程、家政学部・師範家政学部の有志の29回生が佐藤功一の事務所に通い、専門的な指導を受けた。
	1931	1月18日	29回生は、第1回「白目の集い」という音楽会を開催した。
		2月3日	地鎮祭を挙行。各学年の学生は教員らと共に参加した。
		2月27日	家庭週報にて海岸寮建設費の資金報告を行った。音楽会の開催、寄宿舎での節約、雛人形を売る等、29回生を中心として建築費を集めた。28、30、31回生、附属高等学部学生の助力があった。
		6月下旬	竣工
		7月5日	開寮式が行われ、麻生正蔵校長により「天心寮」と命名される。
		8月31日～9月9日	天心寮にて初めての夏季寮「夏期二年寮」が開かれた。大学部1・2年生や、附属高等女学校4年生の夏季寮が開催。
三泉寮カテージ	1931	11月頃	第4代井上秀校長が就任。
	1932	1月17日～18日	（設計課題1） 経済小生活展にて、当時住居学教育を受けたの3年生（30回生）が作成した、軽井沢三泉寮の設計試案や模型等が展示された。来館者と学生の投票による決定した案が同年夏までに建設される計画であった。
		7月～9月頃	三泉寮カテージ1号館（洋風）、2号館（和風）が建設。
		12月	（設計課題2） 31回生が「軽井沢三泉寮設計図案 三十六案」を作成した。
	1933	8月頃	三泉寮カテージ3号館（洋風）、4号館（洋風）が建設。
		不明	（設計課題3） 手書きの平面図5枚（三泉寮の五、六、七、八号館等）が作成された。

表 4：海岸寮と三泉寮カテゴリーに関する記述（『家庭週報』や資料より引用）

<p>海岸寮</p>	<p>「家政学部、師範家政学部の学生はこの機を幸と、日頃の研究にもとづき、更に生活上の経験をも加へて新設の建築設計の計画は有志によつて着々と進められました。¹ 各自思ひ思ひの構図に心をひそめ数多の設計は発表されるに到りました。」</p> <p>「未熟な者が集りこれと云つた適当なものをつくるのが出来ませんでした、そのうち一つを取り出し修正しあひました結果、いよいよそれを建てることに致しました」「出来るだけ切りつめまして経済的に少しでも多くの人利用出来ますやうにと思ひまして設計致しましたので拙い上に不便利不都合な所も多々ございます² がそこにはよろしく御理解願へることと存じます。」</p> <p style="text-align: right;">（家庭週報 1070 号 1931 年 3 月 20 日）</p> <p>「家事科の四年生が昨年九月以来、教授の佐藤功一博士と柴谷女史の指導の下³ にこの設計全部をすっかり受け持ったことです。」</p> <p style="text-align: right;">（朝日新聞朝刊 7 頁 1931 年 7 月 1 日）</p> <p>「木の香の新しい天井から廊下、さては椅子、テーブル⁴ に至るまですがすがしいこの天心寮、思へば一年もたたぬけふ、開寮式をするのが不思議な気さへする。松林の中に突然降つて湧いたやうな楼閣のかんじがないでもない。但し之を聞いたならば、この寮建設に懸命の努力を捧げた二十九回生の人をはじめ、学校の人達や棟梁諸君が嗚憤慨されることであらう。何故なら天心寮こそ苦心と努力の結晶だから。」</p> <p style="text-align: right;">（家庭週報 1086 号（三）1931 年 7 月 10 日）</p> <p>「瓦斯の設備のないお炊事⁵ は、存外忙しいけれども、一方には面白い経験になって、精神修養の副産物として、いろいろの愉快な實際生活を体験して、之からの四年三年の歩調に合せて、識んなる意気に燃えつつ、第二学期を迎へる。」</p> <p style="text-align: right;">（家庭週報 1094 号（七）1931 年 9 月 11 日）</p>
<p>三泉寮カテゴリー</p>	<p>「井上は、成瀬先生が家政学部を実学科として考えたことを受け、各教科目に講義の他に実験実習を課した。⁶ この考えは家政学担当者だけでなく全校の教職員を自宅に招く等、井上自身の過程を家政学の実験場として開放して学生や助手らに教授した。校長に就任してから、軽井沢の修養会において、カテゴリーの生活を強調され、小グループに分けて家庭実習をさせて、修養生活を地についたものにするように導いた。これらのカテゴリーは、その当時の所産である」</p> <p style="text-align: right;">（『井上秀先生』 pp.458-459）</p> <p>「軽井沢では三井高修氏の好意により四件のカテゴリーができ、⁷ 約 10 人の学生が一組となって共に生活し、「家庭管理」の実験室となり他方では精神生活の場となった。」</p> <p style="text-align: right;">（『井上秀先生』 p.494 , pp.566-567）</p> <p>【1・2 号館の設計を行った学生の寮に関する記述】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 当地の通風の関係を主とした東西をあける事⁸。但し相当強い西陽を避けるために樹木を植える。 2. 少人数で家族的に修養生活をなし得る事。寮舎住人内外を収容し得る事。 3. 別荘である故に玄関は敢えてとらぬを本体とし又家具も出来るだけ簡易にする事⁹。 4. ご飯は共同炊事場で炊くので人数の割合に台所は狭くてよい事¹⁰。 5. 共同浴場を設けるために各戸にその準備を要せぬ事。 <p style="text-align: right;">（設計課題 1：家庭週報 1112 号（五） 1932 年 1 月 22 日）</p> <p>一、設計は 31 回生師範科・家政科学生の考案せるもの 一、自由選択の爲め和室は洋室より少なかったこと 一、二階建は本年は一棟もなかったこと 一、屋根の形は選択されたもののみを今一度考究する考であること 一、選択された番号を■教えてさらば今一度研究いたすべく■きかせ下され度きこそ 青写真は学生自身が焼きましたものですから大きさ及び焼き方のまづき■お許しくださいませ責任者 家政館 柴谷¹¹</p> <p>（設計課題 2：「昭和七年十二月 三泉寮設計図案三十六案 日本女子大学住居部」の指導書より、成瀬記念館所蔵）</p>

4-2. 夏季寮の建設過程と住居学教育

1930年に軽井沢三泉寮で開催された29回生の夏季寮にて、海岸寮の建設が決定された。同年9月以降、29回生が中心となり、係分担して建築計画を進めた。当時教育を受けた家政学部・師範家政学部の有志学生が設計を担当し（表4下線1）、12月には10日間程佐藤功一の事務所に通い、住居の教員である佐藤や柴谷の指導のもと（表4下線3）学んでいた。翌年1931年1月、29回生は建築費用を積み立てるために「目白の集い」という音楽会を開催した。その他にも、寄宿舎での節約、雛人形を売る等、様々な方法で資金を集め経済面でも建設に貢献した。28回生・30回生・31回生・附属高等女学校の助力があり約1万3000円の建築費全てを学生の力で集めた。

この背景には、「住居経済」の学びが充実していたことが考えられる。この頃、取り組まれた女学校の料理室の研究では設計だけでなく設備費が詳細に見積もられていることが分かった。当時の住居学教育の課題は経済面の内容を含み、実際に建設されることも考えられていた。同年2月、各学年の学生は教員らと共に地鎮式に参加し、7月の開寮式への参加など同寮の建築過程では、学生が関わる機会が多く設けられた。また、新聞では「設計も費用も女学生の手で 富津の海岸に落成した目白女大の海岸寮」という見出しで海岸寮について報じられ注目された（朝日新聞社（1931））。

三泉寮カテゴリーは1・2号館建設前と3・4号館建設前に設計課題として取り組まれていた。その他にも同寮の設計に関する資料が存在し、継続的に取り組まれたテーマであることが分かった。

1・2号館建設前の1932年1月、日本の経済的問題を背景に女性視点で国民の経済生活へ貢献することを目的とした「経済生活小展」が開催され、学生の日頃の研究成果が展示された。住居を学ぶ3年生である30回生が作成した「軽井沢三泉寮の設計試案十八案」では、各設計の平面図や模型が展示された（表4設計課題1）。三泉寮の建物の老朽化により、同年夏までに10人から12人が住まう寮舎の建設が計画されたことを背景に、この設計が取り組まれた。来館者と学生の投票により設計案が決定される計画であったため、これらの18案から1・2号館が選ばれたことが考えられる。その他の展示物には「軽井沢三泉寮内使用家具」と「軽井沢三泉寮内使

用什器」があり、寮の室内で使用する家具や什器内容も計画されていた。

また、3・4号館建設前の1932年12月に取り組まれた「昭和七年十二月 三泉寮設計図案 三十六案 日本女子大学住居部」（表4設計課題2）より、31回生師範家政科、家政科の学生が軽井沢三泉寮の設計案に取り組み、36案を設計し青焼きの図面を作成したことが分かった。各図案は主に立面図と平面図で構成され、柴谷邦が設計の指導を行った（表4下線11）。これらの課題から選ばれた案が3・4号館として建設されたことが考えられる。

このように夏季寮の建設過程では、学生が関わる機会が設けられ、住分野を学ぶ学生は佐藤や柴谷の指導のもと設計を行ったことが分かった。設計事務所での指導や、展示された設計案の投票が行われたように学外での指導や学外からの評価を受けていたことが分かる。社会との繋がりを持つことで主体的に学んでいたと言える。

5. 夏季寮の設計と佐藤功一の講義内容

5-1. 佐藤功一による住教育と講義の概要

夏季寮を設計した学生は、佐藤の講義を受けていたと思われる。1930年度の講義内容と夏季寮の設計との考察を行う。図1に海岸寮と三泉寮カテゴリーの平面図を示す。食堂等の居間的空間、寮生の寝室となる寮室空間、接客空間、半屋外空間の4種類の空間に分類して表現する。表5に、海岸寮と三泉寮カテゴリーの概要と佐藤の住居学教育の内容との関係を示す。網掛けで示した部分について考察する。

佐藤は、住宅の衛生問題の解決を第一に考え、女子への住居学教育において新しく家を建てるための設計を教育すること問題視した。そして、現存住宅の改善、より良い住環境を整えるための教育を行うことが重要だと考えていた。

本学で佐藤が著した講義に関する資料として、『給湯（1926）』、『暖房・冷房（1928）』、『水（1928）』、『日光（1928）』、『便所（1928）』、『住宅の照明（1930）』があり、これらを使用して講義を行い、住宅設備を整えることで住宅の衛生問題の解決策を唱えたことが考えられる。講義（ノート1）では、瓦斯等の「近代的設備の整った環境を」良い住宅であると説明し、「防火・防盜耐震性の高い構造である鉄筋コンクリート造を最も良い」とした。また、「採光上、居住用の全ての部屋が東南・南向

きにすると衛生的で良い」とした。椅子や寝台（ベッド）を使用した、椅子式の生活を衛生的な住環境であると講じた。佐藤は当時の生活改善運動と関連する内容を講じていたことが分かり、影響を受けていたと考察する。

海岸寮は、8 畳、10 畳、12 畳の3種類の和室 21 室が寮室として設けられた。1 階には食堂、台所、浴室、脱衣室、洗面所、便所、事務室、応接室が配置された。1 号館、3 号館、4 号館は洋風のカテージ、2 号館は和風のカテージである。平面図より 4 棟は異なる設計であることが分かり、生活実験の場を意図した異なる住環境が計画されたと考察する。また、表4の下線9と下線 10 から分かるように、

設備や家具は簡易的であること、共同炊事場や共同浴場があるため、台所は狭く浴室は設けられなかった。住宅よりも小規模な建物であったことが考えられる。

5-2. 構造・設備について

佐藤は、鉄筋コンクリート造を最も良いとしたが、海岸寮は木造であった。木造について講義（ノート1）では「木骨造の利点として、迅速にできること、安価であること、1・2階の家であれば耐震である欠点として燃えやすいこと」を挙げている。表4の下線2と下線5より、同寮は経済面を考慮した設計であり、瓦斯の設備がなかったことが分かる。学生

表5：海岸寮と三泉寮カテージの設計概要と佐藤功一の住教育から受けた影響

夏季寮の概要	寮名	海岸寮	三泉寮カテージ				
	号館		1号館	2号館	3号館	4号館	
	様式	和風	洋風	和風	洋風	洋風	
	階数	2階	1階	1階	1階	1階	
	建設年	1931年	1932年	1932年	1933年	1933年	
	設計者	29回生	30回生	30回生	31回生	31回生	
	建坪	約152坪	25坪	29坪	22.33坪	28.75坪	
	収容人数	94人	9人	約10人	10人	12人	
	居間的空間		約15㎡	約13㎡	約32㎡	約36㎡	
	寮室空間		約48㎡	約36.5㎡	約32㎡	約27㎡	
	1人当たりの寮室空間の面積		約4.8㎡	約3.645㎡	約3.2㎡	約2.25㎡	
	寮室の数	21室	3室	4室	2室	3室	
	その他	便所・台所 浴室・脱衣室 洗面所・事務室 応接室	便所 炊事室	便所 炊事室	便所 炊事室	便所 炊事室	
佐藤功一の住教育との考察	構造	木造（石綿ストレート葺）	不明	不明	不明	不明	
	設備（場所）	焚（浴室）	不明	不明	不明	暖炉（食堂）	
	採光	半屋外空間（方角）	なし	なし	縁側（東南）	なし	ベランダ（東南）
		接客空間（方角）	応接室（東南）	なし	床の間（東南）	なし	なし
	家具	居間的空間	椅子 テーブル	椅子 テーブル	不明	椅子 テーブル	椅子 テーブル
		寮室空間（数）	不明	ベッド（9）	不明	ベッド（5）	ベッド（6）
半屋外空間		なし	なし	藤椅子	なし	なし	

は寮の収容人数を優先し、経済的な設計を行ったことが考えられる。海岸寮は約5か月で建設され、工期が短く工費が安価な木造の利点が生かされた設計である。

住宅の設備について講義（ノート1）では、「家の構造が感情をそそる様で室内がきれいであることよりも、今日の良い住宅とは、水道、暖房、ガス等により行われる家の中の便宜である。」とし、「近代的設備の整った環境を」良い住宅であると講じ、佐藤は住宅の衛生問題の改善策を唱えた。

表4の下線5より海岸寮には瓦斯の設備がなかったこと、図1の平面図より浴室の横に「焚」が設けられたことが分かる。同寮で生活した学生は、「面白い経験」や「精神修養の副産物」と感じていたことが分かった。学生は、十分な設備が整っていない

環境で普段と異なる生活を送り、豊かな自然環境の中での学びの機会を得ていた。

また写真（図2右）より、4号館の食堂には暖炉が設置されたことが分かる。暖炉について講義（ノート2）では、燃焼した瓦斯を屋外に排出するため衛生的であると講じていた。4号館の暖炉は当時佐藤が講じた衛生的な設備と共通する。

5-3. 椅子式の生活について

講義（ノート2）では、「椅子式の生活による衛生的な住環境である」とし、椅子やベッドを使用した衛生的な生活改善を推奨した。表4の下線4より、海岸寮では椅子やテーブルが使用されたことが分かる。また、写真（図2参照）と平面図より、洋風の1号館、3号館、4号館の寮室空間ではベッド、居

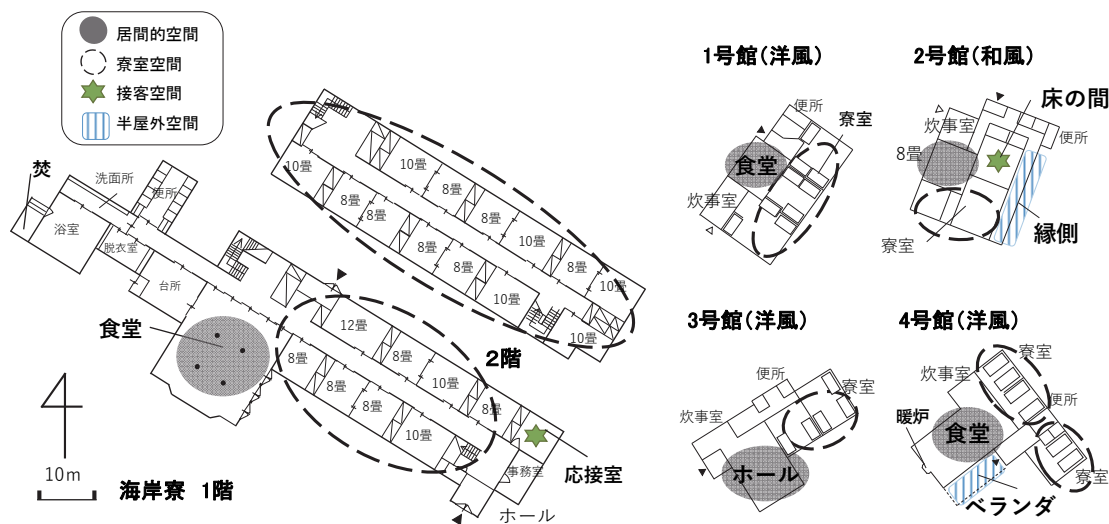


図1：海岸寮と三泉寮カテゴリーの平面図

（海岸寮：家庭週報1070号（七） 1931年3月20日より筆者作成
三泉寮カテゴリー：日本女子大学管理部施設課所蔵の図面より筆者作成）



三泉寮カテゴリー1号館のベッド

三泉寮カテゴリー2号館縁側の藤椅子

三泉寮カテゴリー4号館の暖炉

図2：三泉寮の様子（1978年9月撮影 成瀬記念館所蔵写真より筆者切り抜き）

間的空間では椅子やテーブルが使用されたことが分かった。

和風の2号館の縁側には藤椅子が設置された。また、収容人数と平面図に書かれたベッドの数より、3号館と4号館では、2段ベッドの使用が計画されたことが考えられる。両館は1号館と2号館と比較して寮室の面積が狭く、実用的な家具を使用していた。4棟いずれでも椅子式の生活が導入されたことが明らかになった。

5-4. 採光について

講義(ノート2)では、「採光上、居住用の全ての部屋が東南・南向きにすると衛生的で良い」とした。佐藤が著した『住宅建築衛生篇(1931)』においても、「家屋の設計は各室共各季節を通じて可及的多量の日光を受け入れ得るやうに室と窓を配置し、屋外に全陰影を生ぜぬやう家の形状を定むべきであつて、特に住宅に於ては家族が最も永い時間を過すべき居間を南より東にかけて配置し、午前中の最も有効なる日光を各季節を通じて十分に取り入れ得るやうにするのが理想である。」との記述があり、採光の良い住宅設計を理想としたことが読み取れる。平面図より5つの寮舎は南北方向に対して少し角度をつけ、寮舎全体の採光を考慮していることが分かる。特に、生活の中心となる居間的空間や寮室空間の採光が良いことが分かる。設計課題1を行った学生の記述より、通風や採光を考慮して設計を行っていたことが分かる(表4下線8)。

講義(ノート2)では、客間等の接客空間と半屋外空間である縁側やベランダについて東南向きが良いとした。接客空間である海岸寮の「応接室」や2号館の「床の間」、半屋外空間である2号館の「縁側」や4号館の「ベランダ」は東南向きに設計されている。講義内容と一致することが分かる。

これら5つの夏季寮の建築概要や設計図と、佐藤の住居学教育の内容の考察を行った。夏季寮は採光を考慮した設計であり、椅子式の生活が導入された生活改善が行われた衛生的な寮舎であったと考察する。学生は、佐藤が行った講義で学んだ住宅設計に関する知識を、夏季寮の設計に生かしていたと言える。

6. 結論

夏季寮の設計と佐藤の講義との考察により、採光

を考慮し椅子や寝台等を使用した衛生的な住環境であることが分かった。学生が設計した海岸寮と三寮寮カテゴリーは、佐藤の講義の内容が反映されていた。また、夏季寮の建設過程における実践的な住居学教育は、学生が身に付けた技術や知識を実践する機会であると共に、社会との繋がりを持つ学習形態であった。このような教育は、「社会に貢献する人物の養成」「学生が主体的に学ぶ実習型の指導」という本学の「自学自動」の教育理念と、佐藤功一や柴谷邦の指導により教授された「住宅設計の知識」、「設計の技術」が融合し、実行することが出来たと考えられる。当時の女子への住居学教育においては先進的であり、現在のアクティブラーニングの先駆けである。

自分たちが授業で学んだことを主軸に、建設費用までを集めてでも建物を建設していくという高い意欲と、それを実現させられるだけの佐藤や柴谷による専門的知識の支援、そして諸々の手続きを支援した教員・職員、更に学生を支えてくれていたであろう地域の住民の方々や敷地提供者という、様々な支援の体制が整った上で実現したものであることも重要なファクターである。日本女子大学の住居学教育は、家庭から社会を変えようという成瀬の建学の意思を反映・発展させ、佐藤は当初女性の仕事とは考えていなかったような設計の作業にまで学生を高めたのは、そういった日本女子大学校の教育に異議を感じていた人々の意思の表れでもあったとも言えよう。

【付記】

本稿作成にあたっては、成瀬記念館、そして日本女子大学図書館の皆様にご資料の閲覧等、ご指導いただきましたことお礼申し上げます。また、本学学術研究員である関村啓太氏にも多くの示唆をいただきましたこと、ここでお礼申し上げます。

【参考文献】

- ・朝日新聞社：「設計も費用も女学生の手で 富津の海岸に落成した目白女大の海岸寮」, 朝刊 7頁, 1931年7月1日
- ・石井菜生：「アメリカの‘Housing’の変遷と日本の住居学における建築設計計画学的思考の生成に関する考察」, 日本建築学会, 第599号, pp.189-196, 2006年 2006A
- ・石井菜生：「近代日本女子高等教育に取り込まれ

- たアメリカの住教育理念」, 日本建築学会, 第610号, pp.213-220, 2006年 2006B
- ・井上秀先生記念出版委員会:『井上秀先生』, 桜楓会出版・編集部, 1973年
 - ・桜楓会:『家庭週報』
 - ・桜楓会成瀬先生研究会:『1944年度から1996年度 成瀬先生研究会 活動の記録(10)』, 桜楓会 成瀬先生研究会, 1997年
 - ・佐藤功一工学博士:『住宅の知識 婦人講座第三十三編』, 財団法人社会教育協会, p.54, 1932年
 - ・佐藤功一:『住宅建築衛生篇 佐藤・住宅建築講座第一篇』, 早稲田大学出版部, p.43, 1931年
 - ・住居の会:『卒業生白書』, 住まいの図書館出版局, 1994年
 - ・鈴木賢次・小谷部育子・片山伸也・吉良芳恵・鈴木真歩・田中章・満田高久・園田潔・岸本美香子:「日本女子大学における歴史的建造物の調査・研究」, 日本女子大学総合研究所紀要, 第16号 抜刷, 2013年
 - ・中村政雄:『日本女子大学四十年史』, 日本女子大学校, pp.417-425, 1942年
 - ・新居田苑子:「戦前の日本女子大学校における住居学教育について」, 日本女子大学卒業論文, 2017年
 - ・日本女子大学:『わたしの大学』, pp.152-154, 2019年
 - ・日本女子大学家政学部 100年研究会編:『日本女子大学家政学部 100年の歩み』, 日本女子大学家政学部 100年研究会, 2006年
 - ・日本女子大学家政学部 100年研究会編:『日本女子大学家政学部 100年の歩み 補填』, 日本女子大学教育文化振興桜楓会出版部, 2005年
 - ・日本女子大学:『日本女子大学学園事典創立100年の軌跡』, ドメス出版, 2001年
 - ・美島近一郎:『最近生活改善の栞』, 有文館, 1930年
 - ・米山勇:博士論文「佐藤功一の「建築一都市」観とその影響に関する史的研究」, 早稲田大学院理工学研究科, 2004年
 - ・三泉寮カテゴリー設計課題2:日本女子大学校師範家政科・家政科31回生, 「昭和七年十二月 三泉寮設計図案 三十六案 日本女子大学住居部」, 成瀬記念館所蔵
 - ・三泉寮カテゴリー設計課題3:不明, 「三泉寮 五号館」, 「三泉寮 六号館」, 「三泉寮 七号館」, 「三泉寮 八号館」, 「三泉寮 八号館和風」, 成瀬記念館所蔵
 - ・三泉寮カテゴリーの写真:1978年9月撮影, 成瀬記念館所蔵
 - ・三泉寮カテゴリーの平面図:日本女子大学管理部施設課所蔵

